
緋色ノ鳥ハ花ニ舞ウ

なかゆんきなこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋色ノ鳥ハ花ニ舞ウ

【Nコード】

N1677V

【作者名】

なかゆんきなこ

【あらすじ】

桜咲き誇る南の国は火の都で、空色の髪の少年は一人の少女と出会う。肩上でざんばらに切った漆黒の髪に、水干と短い袴を纏う小柄な少女。足には高下駄、両手に木刀、腰に脇差を差し、悪漢達を前に少女は不敵に笑う。そして何より少女の片目は、武骨な眼帯に覆われていた。少年と少女はやがて、都を騒がす人攫い事件に首を突っ込んでいく。（和風ファンタジーな世界で繰り広げる、少年と少女の物語です。）

一、空色の少年

この世界は、四人の帝が統治する。

東国を統べる木の帝、青龍帝。

西国を統べる風の帝、白虎帝。

南国を統べる火の帝、朱雀帝。

北国を統べる水の帝、玄武帝。

四人の帝、四つの国、四つの都。各国の帝はそれぞれ四神の守護を受け、国を統治している。

ざわざわと人通りの多い大路から少し離れたところにある、小さな橋の上。

立派な造りとはいえない、染料の剥げた紅い欄干に身をもたれさせて、少年はぼうつと川面を見つめていた。

今は花の盛り。四都一華やかと評判の火の都は桜の季節を迎えている。都中に咲き乱れる桜の花びらが、川面にも浮かんでいる。花の匂いに混じってかすかに酒の薫りも鼻を掠めるから、きっとあちこちで酒宴が開かれているのだろう。多くの人々が、美しい花と春の陽気に浮かれているのだ。

「…はあ」

しかし、川面を見つめる少年は深くため息を吐き、浮かない顔をしている。

一見して人目を引く空色の髪に、凍てついた湖を思わせる薄い青

の瞳。整った容貌をした美しい少年だが、眉根を寄せて川面を見つめる風情はどこか頼りなげで、迷子の子犬が戸惑っているようにも見える。

「……………」

彼は無言で、懷からごそごと懷紙に包まれた何かを取り出した。そこに包まれているのは、一つの耳飾り。本来二つで一对になるその耳飾りは、今は一つしか手元がない。鉤状に曲げた銀の先端を耳に開けた穴に通す形状のもので、飾りとして金の模様の入った青い蜻蛉玉が三つ、連なっている。

指先で摘み上げると、それは風に揺れてチャリチャリと鳴った。なんの変哲もない、ただの耳飾りだ。どこにでも、あるような。

「…はあ」

少年は再び、ため息を吐いた。

そして元のように耳飾りを懷紙に包み、懷に仕舞って、空を仰ぎ見る。

春の空は底抜けに明るく、都中を覆う桜がまるで淡く優しい炎のよう。

少年は心地良い春の風に、瞳を閉じた。

冬の空に似て寒々しい色だと、ずっと言われ続けてきた己の髪。低い出自のせいか、ずっと容姿まで蔑まれ続けてきた母にそっくりの容貌をもつ彼もまた、物心つく前からずっと言われ続けてきた。冷たい色をした、冷たい子供だと。

せめてこの春空のように明るい髪で生まれていたら、自分はもう少し違う自分でいられただろうか。

（…今更、感傷に浸ったところでどうなるわけでもないけれど）

少年はもう何度目になるかわからないため息を吐いて、欄干から身を離れた。

（とりあえず、心当たりを片っ端から当たるしかないな。それでも見つからないなら…）

その時である。

遠くから少年を窺っていた男達が数人、こちらに近付いてきたのは。

「……」

人通りの少ない橋の上で、こうも接近されれば警戒もする。少年はさっと身構え、自分よりも背の高い男達を一瞥した。

お世辞にも身なりが良いとは言えない、いかにもゴロツキ然とした男達である。

彼らは少年の顔をじろじろと見回しながら、「コイツは上物だ」と口元にいやらしい笑みを浮かべていた。

「オイ、兄ちゃんどこのモンだ？　ここらじゃ見ねェ顔だなァ。余所モンか？」

垢にまみれた無精髭の薄黒い顔が近付く。

少年は嫌悪に眉をひそめながら、「だったらどうした」と強気に返す。

金目の物目当ての盗賊だろうか。確かに少年は良家の子息と思われるもおかしくない身なりをしているし、金子もたっぷり携帯している。

だが、腰に太刀を差しているにも関わらず絡まれるなど、随分舐められているかと自嘲した。

「なら…、好都合だぜ」

ぐいっと、左肩を掴まれる。食い込むように強く握る男の腕を振り払おうと、少年が腰の太刀に手を伸ばした、その時。

ズコッ！！！！

どこからか回転しながら飛んできた何かが、少年の肩を掴んでいた男の後頭部を強打した。

「ぐあっ！！！」

カランッと音を立てて落ちたのは、一振りの木刀。

「喧しいわ！！　人の安眠を妨害し、あまつさえわしの目の前で無

体を働くとは、良い度胸だな貴様ら」

ゴトツと重い音を立てて橋の床板を踏むのは、黒漆の高下駄。

そしてその持ち主は、なんとも目立つ風貌をした子供……だった。

肩上でさんばらに切られた漆黒の髪は癖なのか所々寝ぐせのように跳ねている。

紅梅重ねの水干に朱色の短い袴をはき、腰には刀よりも小振りの脇差しが一振り。そして先ほど男にブン投げたものと同じ木刀をもう一振り、左手に握っている。

しかし何よりも目を引くのは、子供の右目を覆う無骨な眼帯。恐らく刀の鰐つばを用いたのであろうそれが、幼くも整った顔に不似合いだった。

「んだア、糞餓鬼!!」

男達が一斉に子供に向かって吠える。

しかし子供は自分よりも大きな男達を不敵に嘲笑い、橋床に落ちていたもう一振りの木刀を悠々と拾い上げた。

男達など眼中にないように、その片目が少年の姿を捉える。

「ふーん。お前、綺麗な髪だな。空色だ」

「……」

こんな状況で無邪気に容姿を褒められ、少年はただ言葉も無く子供を見つめた。

啞然と自分を見つめる少年にニイッと笑って見せ、子供は両手に木刀を構える。

「さあかかってこいゴロツキ共。お前らの相手はこのわしだ」

「こっの!! 糞餓鬼があっ!!!!」

挑発に乗せられた男達が、一斉に子供に襲い掛かる。中にはドスを構えた男もいて、それ以前に木刀や脇差しで敵う体格差ではない。少年は慌てて、自身も太刀を抜いた。

しかし子供は平然と、たった二振りの木刀で迎え撃った。

男達の攻撃をひらりひらりと蝶のようにかわし、鋭く利き腕に打ち込む。

「…何だ、弱いな」

至極つまらなそうに、子供が呟いた。

「っ！ 危ない！！ 後ろ！！」

子供の背後から襲いかかろうとする人影に、とっさに少年が叫ぶ。すると子供はくると身を反転し、その重量のある高下駄を回し蹴りで男の腹に叩きこんだ。

「っぐあっ」

「ちっちきしょう…っ。なんて餓鬼だ…」

気がつけば辺りには文字通り、子供に叩きのめされた男達が転がっている。

腕に打ち込まれた者達は、皆手が痺れて武器を握れないようだった。

「お、覚えてやがれッ！！」

お決まりの捨て台詞を吐いて、男達が逃げていく。その背中に、「知るか馬鹿者」と呟いて、子供は木刀を腰に差し戻した。

一方の少年は、太刀を抜いたものの全然出番が無かった。

自分より年下であろう子供の、あまりの強さにただただ驚くのみである。

「…君は…」

「おい、お前」

少年の言葉を遮って、子供がくるとこちらに振り向く。

「お前、警戒心が無さすぎだぞ。都にはああい輩はゴロゴロいるんだ。特にお前は綺麗なんだから、目を付けられやすいぞ」

「あ…、ありが…とう…？」

貶されているんだか褒められているんだかわからない忠告に、少年はただ頷く。

そして子供はまた、ニイッと不敵に笑った。

「礼はいらん。わしの傍で騒がれて迷惑だっただけだ」

「そういえば、君はどこにいたんだ？ すぐ近くにいたのか…？」

傍で、と子供は言うが、こんな目立つ子供を見かけた覚えがない。

「ああ。この橋の下でな、ちょっと昼寝をしていた。そうしたら上がやけに騒がしくなったので黙らせようと、上がって見たらあのザマだ」

(…だ、黙らせるって…)

確かに子供は黙らせてしまったけれど。

「それは…すまなかった。邪魔をしてしまったな。それから、改めてありがとう。助かったよ」

少年が真面目な顔で頭を下げると、子供は一瞬きょとん、となつて、すぐにぷつと噴き出した。

「ははっ、まア気にするな。それより、この辺りは本当に気を付けた方が良くぞ。治安が良くないし、お前みたいに人目を引く余所者は狙われやすいからな」

「そんなに…人目を引くだろうか…？」

首を傾げれば、子供はまた愉快そうに笑った。

「なんだ、お前鏡を見たことがないのか？ そこの役者よりよほど綺麗な顔立ちをしているじゃないか。それに、そんなに綺麗な空色の髪は珍しい」

「そう…かな…」

少年は顔を曇らせ、己の髪を見つめる。

「綺麗…か。冷たい色だとは…よく言われるけど…」

「ん？」

「…だから、あまり褒められたことがない。冬の寒空のようだと、むしろ嫌われていた…」

「んん？ お前…、」

どうして、出会ったばかりの子供にこんなことを言ってしまうのだろうか。

まるで愚痴を零しているようだと少し後悔し始めた時、子供が妙に真面目な顔で言った。

「冬は嫌いか？」

「え…？」

「わしは冬が好きだぞ。寒いのはちょっといただけんが、だからこそ温かさを感じ入る。それにな、冬は空気が一番澄んでいるんだ。その、ピンと張りつめた感じが良い。雪遊びも、よう嗜むぞ」

だからな、と子供は微笑む。

「お前の髪は、好きだ。冬の空の何が悪い。それに、そういうことを言う輩はお前がどんな髪の色をしていても、口さがなく言うであろうよ。あまり気にせんことだ。そういう輩の言に、振り回されることはない。言われたことがないのなら、わしがいくらでも言うてやろう」

綺麗な髪だと。

子供はどこか大人びた言葉で、そう少年を慰めた。

「…ありがとう…」

そして少年は、出会ったばかりのこの不思議な子供の言葉に、素直に微笑みを返した。

二、都の噂

所は変わって、ここは三条通りに店を構える一軒の酒樓。

とにかく助けてもらった礼はしたいという少年を、子供がここへ連れてきたのだ。

まだ昼前だというのに、店内はすでに賑わっている。常連客らしい男達数人が酒を呑んで笑い合っている様は陽気ではあるが、子供が出入りするような場所ではない。

しかし子供は物怖じもせず、すたすたと中へ入って行った。慣れたように常連客達と軽く挨拶を交わしながら、奥の席に着く。そして少年を向かい側に座らせ、店員を呼んだ。

「おい六太！ いるか！」

「はいはい！ って、何だコウ姉エか」

（えっ…）

店の奥からぱたぱたと出てきたのは、藍色の前掛けをつけたまだ幼い少年だ。

六太と呼ばれた彼は、丸い盆に載せた茶を二人の前に置いて、少年の顔を見てにやっと笑う。

「ずいぶん綺麗なお連れさんと一緒だね。連れ立って花見帰りかい？」

「まア、似たようなもんだな。そこで知り合ったんだ。ああ、今日は飴湯をくれ」

「はいはい。それで、お代はいつものように？」

「いや、今日はこいつの奢りだ」

な？ と同意を求められ、少年は「ああ、」と頷く。

礼は飴湯一杯で良い、ということなのだろう。

それよりも気になるのは…、

（今、確かに姉エ…と…）

「ふうん。それじゃあ、こっちのお連れさんは何にする？」

「…俺も飴湯を」

「はいよっ。少々お待ちをーっ」

言って、六太は再び店の奥に消えた。

そして少年の目の前に座る子供が、「お前、甘い物は好きか？」と尋ねてくる。

「ここの飴湯はけっこう甘いぞ。平気か？」

「甘い物は、嫌いじゃないし。大丈夫だろう。子供の頃に飲んだきりだから、懐かしいな。それより…」

少年は、子供の顔をじっと見つめた。

子供は両手で湯飲みをおさえ、ふうふうと息を吹きかけている。

「…君は…女…なのか…？」

「ハア？ 今更何を言うか。どっからどうみても女だろうが」

心外だ、とでも言うように、子供が眉をしかめる。

「……………」

いや待てと、少年は言いたかった。

普通の女の子はそんな傾^{かぶ}いた恰好はしないし、そんな乱暴な言葉遣いもしないし、木刀を振り回してゴロツキを追っ払ったりしない。随分変わった女の子が、火の都にはいるものだ、少年は思った。「そういえば、まだ聞いていなかったな。お前、名前は？ ちなみにわしはコウという。いつまでも『君』と呼ばれてはくすぐつとうてかなわなので、コウと呼べ」

皆そう呼ぶと、子供―コウは言う。

「…浅葱だ」

「浅葱か。色の名前だな。わしも同じだ。くれない、と書いて、紅^{こう}と読む」

名前を言い合ってしまうと、紅はもう興味を無くしたように浅葱の顔から視線を外し、今度は何の変哲もない店の隅をじっと見つめ始めた。まるで猫のようだと、浅葱がそんな紅の様子を見ていると、

さらに数人の男達ががやがやと店に入ってくる。

各々に工具箱や荷物を抱えた、職人風の男達だ。

男達は紅の姿をみとめると、「おう、お嬢じゃねエか」と気軽に声を掛けてくる。

「昼間っから色男と逢引きたア大したもんだな。…って、随分とまあ綺麗な男を引っかけたなアお嬢」

がははと豪快に笑うのは、男達の中でも一等体格の良い男だ。

どうやら紅と知り合いらしい彼らは、当然のように浅葱達と同じ卓に着いた。

そして浅葱達の分の飴湯を運んできた六太に、「いつもの頼まア」と注文する。

「おい兄ちゃん、氣イつけた方がいいぞ。お嬢は顔は綺麗エだが腕っ節が強すぎらア。なあ？」

違エねえ違エねえと、男達が陽気に笑う。

むすつと仏頂面になった紅が、不機嫌そうに「黙れ酔っ払い共」と毒吐いた。

「ここに居る奴らア皆、お嬢にブツ飛ばされたクチよ。がはは、お嬢の腕っぷしに敵う奴ア、もうここにゃ居ねエよなあ」

「そうそう。酔っ払って取っ組み合いの喧嘩になって暴れてたところを、紅姉エにみーんな伸されちゃったんだよね」

盆に熱燗を数本載せて持ってきた六太が、くすくすと笑いながら言う。

当の紅はというと、もう我関せずと熱い飴湯をふうふう吹いて冷ましていた。どうやら猫舌らしい。

六太や男達が言うには、彼らはある日、仕事が思うように進まずに機嫌がすこぶる悪かった。そんな中で荒酒を呑みまくって悪酔いしてしまい、店に居た他の客と些細なことで言い争いになり、止めに入ったこの酒樓の店主も巻き込んだの大喧嘩に発展したのだそうだ。そこへ、この酒樓の二階に逗留していた紅が降りてきて、

『喧しいわっ!!』

と一喝。手当たりしだい木刀でブン殴って回ったらしい。
結果、ものの数刻で大の男十数人が一人の少女に伸されてしまった。

「それ以来、逗留してる間は店の用心棒も兼ねてもらってるんだ。
おかげでここ最近はずっと平和だよ」

「逗留：一人でか？ 紅は火の都の人間じゃないのか？」

話を振ると、真剣になって飴湯を冷ましていた紅が顔を上げた。

「…んー、まあな。しばらくはここにいますつもりだが…」

「うちとしては、酔っ払いが暴れた時紅姉エがいてくれると安心だから大歓迎だよ」

他の客に呼ばれての去り際に、六太が言う。

「うんうん。以来この店で呑む奴ア、お嬢が怖くて暴れねエしな」

「お嬢にブツ飛ばされるのに比べたら、俺らのゲンコツなんて軽いもんだよ」

聞けば聞くほど、紅の武勇に驚くばかりだ。実際にその腕前を見たとはいえ、相手はさっきのゴロツキ達よりも多人数。しかも酒を呑んで理性を無くしていた男達は、手加減も容赦もなく紅に向かっていっただろう。それを、たった一人で倒したのだ。

知れば知るほど常識はずれな少女だ。しかしそれだけの腕を持つていながら、今は年相応に飴湯に頬をほころばせているから、こちらもついつい表情が緩んでしまう。

(…甘い…)

久しぶりに口にした飴湯は、舌の上でとろけるように甘く、そしてなんだかほっとする味だった。

「…ところでよ。兄ちゃんはお嬢のコレかい？」

浅葱の隣に座った男が、酒で鼻っ柱を真っ赤にして、親指を立ててみせる。

意味もわからず浅葱が首を傾げると、紅が盆を投げつけ、男の鼻っ柱に命中させた。

「うがっ」

「下世話なことを言うな。浅葱はわしのオトコではない。その先の橋で、ゴロツキ共に絡まれているところを助けただけだ」

（そうか…、親指立ては恋人のことを指すのか…）

浅葱が変なところで感心してこそつと親指立てを真似すると、他の男達も面白がって「女はコレよー！」と小指を立てて見せてくれた。

ふむふむと頷いて、今度は小指を立てて見せる。その浅葱の素直な様に、男達は愉快そうに笑った。

「ははは。面白い兄ちゃんだな。しかし氣イつけなよ。この辺じゃ最近、人攫いが出るらしいからな」

熱燗をくいと飲み干して、そう話を振るのは最初に声を掛けてきた男だ。

「人攫い？」

紅と浅葱の声が重なる。

二人が興味を示したのが嬉しいのか、男は「おうよ」と頷いて身を乗り出した。

「なんでもよ、攫われんのは美男美女ばっかって噂だぜ。兄ちゃんも、ついでにお嬢も氣イつけろよ。この時期は花見だってんで酔っ払い同士の喧嘩が多い。それで役人連中も手が回らねーのよ」

美男美女ばかりを狙う人攫い…。そう言われてみると、先ほどのゴロツキ共も浅葱の荷物や金品目当て、というより浅葱の容姿を気にしていたようだった。それに、他の国から来た旅人ならば、行方知れずになっても捜査されにくい。人攫いにとっては格好の獲物、というわけだ。

浅葱は湯飲みに残った飴湯を一気に飲み干し、ふうとため息を吐いた。

「人攫いが顔で獲物を選んでいいるなら、連れていかれる先はどこかの金持ちの妾宅か遊郭でしょうね…」

冗談ではない。そんなところに売られてたまるか。

コトン、と湯飲みを置き、苦々しげに呟く。

「だろーなア。まったく、嫌な話だぜ。無理やり連れてって無理やり体ア売らせるなんざ、人のすることじゃねェ!」

まったくだ! と頷く男達。浅葱も心の中で同意して、ふと難しい顔をしている紅に気付いた。

「…検非違使は何をやっているのだ…」

(え…?)

「おっと、そろそろ仕事に行かねーとな。お嬢、兄ちゃん、またな」男達は頼んでいた酒を綺麗に飲み干し、また荷物片手にがやがやと出て行った。

残された紅は、まだ眉をしかめたまま、不機嫌そうに毒吐く。

「さっきのゴロツキ共、逃がさず捕らえていればよかったな。ちっ、胸糞悪い。この都でかような悪さをするとは…」

「紅？」

「放ってはおけん。人攫い共を捕まえて、まとめて役所へ放り投げてやる」

(…紅にならできそうだと、思ってしまったから怖いよな…)

とんでもなく強い少女は、軽くそのくらいのことやってのけそう
だ。

しかし、もう自分には関わりの無いこと。この店を出てしまえば、この広い都の中、もう出会うことも無いだろう。

「…それじゃあ、俺もこの辺で。今日は世話になった。ありがとう」
席を立ち、飴湯の代金を…、と腰に手をやったところで、浅葱の動きがぴたりと止まる。

「どうした？」

(…まさか…)

路銀はすべて、腰に下げた巾着に入れていた。それが、巾着ごと無い。

帯に結んでいた紐の先が切られている。恐らく、人通りの多い場所を通った時スリに盗まれてしまったのだろう。

浅葱は路銀を盗られたことよりも、今の今までそれに気付かなか

った自分の間抜けっぷりに落ち込んだ。

三、金平糖と桜の夜

さあつと音を立てて、満開の桜が散っていく。

酒樓の二階、開け放たれた障子窓から夜桜を眺めていた浅葱は、何度目か知れないため息を吐いた。

「…なんだ。シケた顔をして、何を考えている？」

二組み敷かれた布団の上に寝そべっている紅が、寝巻の浴衣からのぞく足をぷらぷらさせながら尋ねる。

「自分の間抜けさ加減に嫌気が差しているんだ」

路銀を全て盗られてしまった浅葱は、飴湯代はもちろんその日の宿泊費すら無くしてしまい、途方に暮れた。酒樓店主の好意でしばらくここに滞在させてもらうことになったが、知らせを送った実家から新たな路銀が届けられるまで、文無しである。

その間の代金をツケとして、金が入り次第払うことを店主が認めてくれたのは、紅の口利きがあつてのこと。おまけに紅は、他の部屋に空きがないからと、自分の泊っている部屋に快く浅葱を相部屋させてくれた。まったく、紅には頭が上がらない。

「くっ。確かに、間抜けだな」

小さく笑って、紅は寝転がったまま金平糖をつまむ。枕元に漆塗りの皿を置いて、そこに一盛りのせているのだ。

さらにその隣には、甘酒の入った銚子が二本。どうやら紅は甘い物が殊の外好きらしい。飴湯一杯でもう十分な浅葱にしてみれば、正直金平糖をつまみに甘酒を呑む様には胸焼けを覚える。

「…最初に会った橋でも、やたらため息を吐いていたな。癖か？」
そんな所まで聞かれていたのか…、と浅葱はますます情けない思いである。

「癖…なのかな…。まあ、色々とうまういなくて。旅は初めてだし、探し物はなかなか見つからないし…」

「探し物？」

興味を持ったのか、紅がぴよこんっと起き上がる。

浅葱は、まあこれくらいなら話してもいいかと、懷から懷紙に包んだ耳飾りを取り出した。

「この耳飾りの片割れを探しているんだ」

「ふうん」

間近ににじり寄って、まじまじと耳飾りを見つめる紅。

「これは浅葱の大切な物なのか？ だから探すのか？」

「大切…？ これは一応…母の形見なのだが…。大切、というのは違う…気がする。つい先日まで、この耳飾りの事は知らなかったし…」

母の形見なら他にもある。

それこそ、ずっと大切にしてきた物が、今も自分の部屋に残されている。

「ならば何故探す？ なにか事情があるのか？」

紅の隻眼が真っすぐに浅葱を見つめる。

少女の瞳は、名前と同じ紅の色だ。

「…父に、言われたんだ。この耳飾りの片割れを見つけてきたら、自由にしてやるって」

「…自由？」

「ああ…。俺の母は、元々この都で遊女をしていた。そこを父に見初められ、身請けされて俺を産んだ。だが出自の低さから父の正室や側室達にさんざん目の敵にされて…」

もつとも、出自の低さなどただの口実で。

父の寵愛を一身に受ける美しい母を、妬んでいたのだろう。

「母はいびられ続け、最後には病であっけなく死んでしまった。俺も、母に顔立ちが似ているらしくて余計に風当たりがきつかった。だが父には俺の他に正室の産んだ兄しか子がなく、俺はもしものためにずっと後…いや、家に縛られ続けてきた」

表面上は父の次子として扱い、影では自分を蔑む正室や側室、そ

の女官達。

自分は望まれていない存在なのだと、否応なく思い知らされた冷たい場所。

唯一の庇護者である父でさえ、自分を通して母を、最愛の女を見ているに過ぎないと気付いたのはいつからだっただろう。

いつしか何かを望むことも諦めて、自分はただ流されるままにあの場所で生きていくしかないのだと思っていた。

「……………」

紅は黙って聞いている。その紅い、一つしか見えない瞳に、自分はいったいどんな風に映っているのだろう。

「そんな俺に、最近縁談が持ち上がった。一度も会ったことのない相手だけど、だからと言って断る理由もない。でもそうしたら、父が言っただ」

お前はそれでいいのか、と。

「笑っちゃうよね、今更。俺に選択肢なんて存在しなかった。今まで、ずっと…」

でもそうしたら、父はとても悲しそうな顔をして、言ったのだ。

母の残した耳飾り。二つで一对になるそれは、昔母がこの火の都で紛失してしまったらしい。その片割れを見つけてきたら、浅葱の望むように好きに生きていいのだと言った。

「家に残るのも、出て行くのも…。好きに俺が選んで良いんだって、言っただ」

正直、この広い都で十数年前に紛失した耳飾りの片割れなど、見つかる可能性は無いに等しい。父が何を思ってこんな交換条件をつけてきたのかはわからないが、これは初めて浅葱に用意された『選択肢』。だから浅葱はこの火の都へ来た。自分の自由を、自分の力で得るために。

「手掛かりは、母が昔居た遊郭の名前だけ。それ以上は何の手掛かりも掴めていないけど、まあ気長に探すことにするよ」

せっかく初めて家の外に出られたんだし。初めての火の都を、楽

しむのも悪くないかもしれない。

焦る必要は、無い。紅相手に胸の内を吐露して、何だか不思議とそういう気分になった。

「自分で自由を勝ち取る、か。いいな、それ」

紅はにっこり笑った。

「うちも似たようなものだ。これをやらなければいけない。あれをやってはいけない。まったく、口煩い者が多すぎる。クソ親父にも、」

何度女らしくしろと言われたかわからん、と紅は眉をしかめる。

そして紅は、枕元に置かれた脇差しを掴んで、浅葱に見せた。

「これはな、わしの宝物だ。三年前、わしが十になった祝いに父が造らせたものだ。わしは嬉しくて、一生大切にすると誓った。そうしたら父も喜んで、わしが十三の歳になったらこれと揃いの太刀を拵えてくれると言った。にもかかわらず、あのクソ親父はっ」

呼称が父からクソ親父へと変わり、紅の表情がますます不機嫌にしかめられる。

「今年の祝いには、衣やら宝石やら化粧道具やらをわんさか贈ってきおった。約束が違うと文句を言いに言ってやったら……」

「や、やったら……？」

「言うに事欠いて、『お前に縁談がきたぞ。喜べ』と。あのクソ親父っ。『これからはもっと大人しくしろ。女らしくしとやかに振る舞え』と言いおった。おまけに、あの太刀の事もすっかり忘れていたのだ。わしは三年間、それを楽しみにしたくもない稽古事にも励んだというのにっ!!」

フンツと、いらだたしげに紅の拳が床を叩く。

そして、どこか悪そうな不敵な笑みを浮かべた。

「だから、わしは家を出てやったのだ。あのクソ親父に、ひと泡吹かせてやるためにな」

土下座して謝るまで許さん！ と紅は言う。

これが彼女なりの、自由の勝ち取り方、なのだろう。

「かっこいいな」

「だろう？」

一転して上機嫌に、紅が笑う。

見ていて飽きない少女だ。そう浅葱が思っていると、紅はまたころんと体を横たえて、浅葱の膝に自分の頭を乗せてきた。膝枕だ。

「お前もな、顔も知らん女との縁談などやめておけ。わしなら絶対に嫌だ」

「…どうして？」

「どうしてって、お前なあ。そんなもん、ちゃんと相手を好きになれるかわからないだろう」

さも当然と言わんばかりに、紅が言う。

「好きになれるかわからない相手と結婚しても、お互いが不幸になるだけだ。心の通わない結婚は、辛いぞ」

「……………そうかもしれないね」

自分より幼い少女のくせに、ずいぶん大人びたことを言う。

浅葱は苦笑して、その小さな額に手を当てた。

春風に冷えた手が、子供の温かい額を冷やす。それが心地良いのか、紅は猫のように浅葱の体に身を寄せた。

「冷たくて気持ちいいな…」

「それは良かった。末端冷え性なんだ」

冗談めかして言うと、紅は「ははっ」と愉快そうに笑う。

「……………紅は、このまま逃げようか……………」

「ん？」

「…このまま逃げようとは思わないのか？ 女扱いされることも、

縁談も嫌なのだろう？」

このまま逃げてしまえば、自由になれる。

それは浅葱も考えていたことだった。それに案外、父も自分が逃げ出すことを望んでいるのかもしれない。暗に、もうお前はいらないのだと。そういうことなのかもしれない。

「……………わしは逃げぬよ。うちに帰る」

返ってきたのは、不似合いなほど穏やかな声。

「：わしには守らねばならんもの、守りたいものがある。だからな、わしは帰るよ。腹立たしいことがある。ままならぬことも。その度に暴れて、家を出はするが：」

それでも逃げるわけにはいなく、紅は言った。

紅はもう自分の宿命を受け入れている。それは、浅葱のような諦めではなく、覚悟を持つてのことだ。

しかし自分には、はたしてそんな覚悟があったのだろうか。

「なあ浅葱、金平糖をくれ」

くれ、と言うからには自分で動く気はないのだろう。やれやれと皿を引きよせながら、それでも嫌な気がしないのが不思議だ。

紅が女の子なのに男らしくて偉そうなのは、もう自然なことのよう感じられる。

相変わらず浅葱の膝を枕に寝転がっている紅の口元に、金平糖を一欠け運ぶと、小さな口がぱくつと咥える。

「：好きなのか？ 甘い物が」

見ていればわかることだけれど、そう尋ねると紅はこくこくと頷いた。

「ああ好きだ。み：家に居る時は口煩いヤツがいて、思うように食べられなかった。だから家出中は好きに食うのだ」

「その人だって、紅の身を案じて言うのだろう。甘い物ばかりでは体に悪い」

そう言いながらも、甲斐甲斐しく紅の口に金平糖を運んでやる浅葱。

「：むむ。わかった。次からは加減しよう」

「そうしなさい」

言って、しばらく額を撫でてやると、いつのまにか紅はすうすうと寝息を立て始める。

やれやれとその体を抱き上げて布団に寝かせると、浅葱もまた隣の布団に横になった。

障子窓から、風に揺れて桜が散っていく様が見える。
それをしばらく眺めている内に、浅葱もまた深い眠りに落ちてい
った。

三、金平糖と桜の夜（後書き）

ナチュラルにいちやつく二人。しかし紅が男前すぎて…（笑）

四、酒樓の朝

目が覚めた時、浅葱は息苦しさに「ぐっ」と呻いた。

見れば、昨夜は確かに横に寝ていたはずの紅が自分の腹の上に乗っかっている。

(…寝相…悪っ…)

呆れつつ紅の体をどかすと、二人の布団や畳の上にちらほらと桜の花びらが落ちていることに気付いた。昨夜、窓を開けたまま眠ってしまったせいだろう。ついと髪に手をやれば、頭にも数枚花びらがついている。

それを指でつまんで取りながら、浅葱は障子窓から早朝の町並みを眺めた。

酒樓近くで開かれる朝市は、すでに多くの人で賑わっている。

ここ、三条通りは都の中ほどに位置し、多くの商工業者が集まる区域だ。様々な店が軒を連ね、活気にあふれている。その中には何軒か道具屋か古物店もあるだろう。今日はそこへ行ってみようか…。どうせ金が届くまではあまり遠くへは行けないのだ。まずは近場から、しらみつぶしに当たってみるかと思案していると、かちゃかちゃと食器の鳴る音と、こちらに向かってくる人の足音が聞こえてきた。

「おはようございます、浅葱さん。あ、あーもう、紅姉えったらまアだ寝てるんだ」

襖を開けて入ってきたのは、朝食を届け来たらしい六太。

丸い盆の上に、鍋が一つに茶碗が二つ。そして小皿に梅干しや菜の漬物が載っている。

「浅葱さんも粥でよかったかな？ 紅姉えはいつもこれだからさ」
浅葱の前にてきばきと朝餉の用意をしながら、六太が言う。

「ああ、ありがとう。いただくよ」

「どうしたしまして」

笑顔で応え、六太は昨夜紅が食い散らかした金平糖や甘酒を片付け始める。

「あーあもう、こんなに散らかして。浮かれすぎだよ、紅姉え」

(…え?)

「浮かれ…ていたのか?」

「そうだよー。あれで結構、独りが苦手みたいでさ。今までは遅くまで店に降りてたり、うちのおやっさんの仕事を眺めてたりしたんだけどねエ」

人が居るところじゃないと落ち着かないみたい、と六太は言う。

「でも昨日は浅葱さんが一緒にいてくれたから、嬉しかったんじゃないかな。金平糖はいつもつまんでるけど今回は食べきれないほど頼んでるし、甘酒だっていつもはこんなに飲まないんだよ」

親への反発から家を出た紅。

年の割に大人びて見えるが、やはりまだひと肌恋しい子供なのだ。

「あーあー、変な寝相。ってまアた眼帯付けたまま寝てるし…。もう、痕になるって言ってるのになあ。ほら紅姉え、起きて。粥が冷めるよ」

浅葱の向かい側に紅の分の膳も用意し、六太がまだ寝転がったままの紅を揺さぶり起こす。紅は鬱陶しげに六太の手を払った後、寝ぼけ眼をこすりながらゆっくりと起き上がった。

「…う…るさい…。もっと静かに起こせ…」

「はいはい。おやっさんに叩き起こされるよりはマシでしょ? ちゃんと座って食べるんだよ。前みたいに寝転がって粥を掻き込んだら咽^{むせ}るからね」

(…咽たことがあるのか…)

それは行儀が悪いぞと、浅葱は思った。

「じゃあごゆっくり。膳は後で取りに来るね」

紅をしつかりと膳の前に座らせ、六太は部屋を出る。

紅は頭をぽりぽりと掻きながら、空の茶碗を浅葱に向けた。

「よそえ」、ということなのだろう。浅葱は苦笑して、鍋の蓋を開けつやつやと炊かれた粥を紅の茶碗によそってやる。

「ん、すまんな」

「いいよ、これくらい」

二人で手を合わせ、粥を食べ始める。

丁寧に炊かれた粥と、ほどよく漬かった漬物に若い二人の食欲は進む。あっという間に一杯目を平らげ、二杯目をよそおうとすると紅もまた空にした茶碗を差し出した。

先に紅の分をよそってやると、少女はにこっと笑みを浮かべる。

人好きのする笑顔だ。

「おやっさんの粥は美味いだろう。漬物もな、おやっさんが自ら漬けているのだ」

自慢げに言う。おやっさんとは、この酒樓の店主の事だ。

下の店を出している料理も宿の食事も、すべて店主が賄っているらしい。

「うん、美味しいな」

漬物を噛みながら、粥を啜る。

二人は鍋いっぱい粥を綺麗に平らげた。後に残ったのは、梅干しの種がころんと二つ。

「「ごちそうさまでした」」

そろって手を合わせる。箸を下ろすと、紅が浅葱に尋ねた。

「それで、浅葱は今日はどうするのだ？ 母上がいたという遊郭に行ってみるのか？」

「遊郭には金が届いてから行こうと思う。話を聞くにも、先立つものが要りそう。今日は道具屋や、古物店を回ってみようかと思っているが…」

紅はそれなら、と話を切り出した。

「わしと街を回ってみないか。もちろん、道具屋や古物店にも寄ろう」

「いいけど…。紅は何をするんだ？」

浅葱の用事に付き合うというより、何か紅にも目的がありそうな口振りだ。

問われ、紅はにやっと笑った。

「人攫い退治の下準備だ」

四、酒樓の朝（後書き）

短くなりますが、ここで切らないと長くなるのでいったん切ります。
これを書いていてとてもお粥が食べたくなりました。

五、漆黒の蝶

狭い店内を埋め尽くす物、モノ、もの。乱雑に置かれた書籍や巻物は厚い埃をかぶり、綾錦や絹織物の反物は無秩序に壁に掛けられている。

古びた卓の上に載った箱からは装飾品が溢れ出て、店の隅には色あせた竹籠の中に刀が何本も突っ込まれていた。

(…変な店だ…)

それが浅葱のこの店に対する第一印象である。

三条通りにいくつかある道具屋、古物店を紅の案内で回った後、連れてこられたのがこの店だ。

外から見ると普通の民家のように、看板の類も出ていないが、この店は一応『骨董屋』であるらしい。まさかと思いつつ店主に例の耳飾りの事を尋ねたが、

『うちに流れてきたことはないね』

と、古い台帳をめくりながら言われた。台帳は、この店に集められた骨董品の目録であるらしい。

そしてこの店に浅葱を連れてきた紅はというと、今は熱心に中古の着物を眺めている。中古といっても、十分美しい女物の着物だ。

昨日は女物の道具類を父親に贈られたと言って怒っていたのに、今は真剣にそれを見つめている。口ではああ言っているけど、やはり女の子。こういうものに興味があるんだと、浅葱は思わず微笑む。

「? どうした、いきなり笑ったりして」

「いや。紅もそういう物に興味があるんだなと思って」

しかし紅は無然として、「何を言うか馬鹿者」と不機嫌顔だ。

「わしはこんなひらひらしたものに興味などない。必要だから吟味していただけだ」

「必要？　なんでまた」

「今朝言っただろう。『人攫い退治の下準備をする』と」

「言っただけ…」

それと女物の着物とがどう結び付くのかと、浅葱は首をかしげる。
「人攫い共の根城がわからん以上、わしが囷となるのが手っ取り早い。わしはこんな面相だが、女物の着物を着て被^{かす}きをかぶればまア見えんこともないだろう」

紅は己の眼帯を指差してそう言った。

確かに、綺麗な着物を着て被^{かす}きで片目を隠してしまえば、美しい少女に見えるだろう。

「人攫い共がわしに喰い付いたら大人しく付いて行って、攫われた者達を解放する。そして人攫い共をまとめてブツ飛ばしてやるのよ」
紅はそう自信ありげに言うが、事がそう簡単に運ぶだろうか。

（……相手が何人いるかも、どんな得物を持っているかもわからないのに……）

腕が立つとはいえ、紅一人が相手をするには危険だろう。

本当は、無茶をせず役人に任せておけと言いたいところだが、この少女は聞くまい。なら…、

「…紅、」

「ん？　なんだ、浅葱」

「…俺がやるよ」

「は？」

「囷役。お前には助けられた恩がある。それに、忘れたのか？　人攫い共は一度、この顔に喰い付いている」

「し…しかし、これは元々わしが言い出したことだ。お前を巻き込むのは…」

「紅が囷をやるより、よっぽど確実だと思うよ。それに俺だって、一応身を守る術は心得ているから、大丈夫だ」

しかし、それでも、と紅は反論してきたが、結局浅葱は折れなかった。

「……わかった。なら、ちょっとこっちへ来てくれ」

紅はまだ納得がいかないようではあったが、一応頷いた。

そして浅葱の袖を引いて、店の奥へと進んでいく。

奥には店主の老人が一人、番台に座って店番をしていた。

「おい、翁^{おきな}。あれを出してくれ」

紅が店主に呼び掛けると、店主は無言で棚に囲まれた一角の奥へと消えて行った。

そしてしばらくして戻ってきた老人の手には、一つの古びた鳥籠が。

(…蝶…?)

しかし鳥籠の中には、鳥ではなく蝶が一匹入れられていた。

全体が漆黒に覆われた一匹の蝶。ぱたぱたと羽ばたく翅からは、虹色に輝く燐分が舞う。

初めて目にする不思議な美しい蝶に目を奪われている浅葱の傍らで、紅が鳥籠と硝子の小瓶を受け取る。瓶には透明の液体が入っていた。

「この蝶はな、この香料の匂いを追う性質がある。だから、この香料を衣に吹き付けておけば、たとえ姿を見失っても、この蝶が行く先を教えてくれる」

元々は自分に香料を吹きかけて蝶を酒楼に預け、万が一自分が戻らなかったとき検非違使に蝶の後を追わせるようにするつもりだったという紅。

「この香料を衣に付けておけ。たとえ見失っても、蝶の後を追いつ、必ず浅葱を助けに行く」

浅葱は「ああ、わかった」と了承し、小瓶を受け取った。

無理に尾行して相手に気付かれるよりは、時を置いて蝶を追った方が確実かもしれない。

しかしこんな珍しい蝶、値も張るのではないかと浅葱が怪訝に思っていると、紅はごそごそと懷から巾着袋を取り出し、中から一粒の宝石をつまみ上げた。

「!？」

それは浅葱の素人目にもわかる、極上の紅玉である。

「代金はこれでかまわんか」

「十分ですよ。毎度」

店主はもちろん、上機嫌で蝶を売ってくれた。あれだけの紅玉、売れば庶民が一年は働かなくても暮らしていけるほどの代物である。

「いいのか、紅。あんなに高価な物を簡単に手放したりして…」

「かまわん。あれはわしのクソ親父が寄越した胸糞悪い代物だからな。わしは全然興味が無いが、こうして欲しい物が買える。捨てずに路銀代わりに持ってきておいてよかったわ」

まだゴロゴロあるしの、と愉快気に笑う紅。あれだけの代物をまだゴロゴロ持っているなんて、よほどの富豪の令嬢なのだろうか。

傾いてはいるが着ている物は上等だし、言葉は時々汚いがどこか威厳がある。

一体、この少女は何者なのだろう。

「ん？ わしの顔に何か付いているか？」

「…いや、なんでもないよ」

じっと見つめてしまっていた浅葱の視線に気付いた紅が、「どうした？」と首を傾げる。

(…変に勘ぐるのはよそう…)

紅にも彼女なりの立場なり事情なりがあるのだろう。

そう。浅葱が自分の正体を明かせないのと同じように。

六、追跡

いったん酒樓に戻って夕方になるのを待ち、二人は再び街に繰り出した。

浅葱がなるべく人気の少ない所を歩き、その後を距離を置いて紅が追っていく。

人攫いが浅葱に目を付けるのか、それがいつになるかはわからないが、二人とも長期戦を覚悟していた。

油断させるために手ぶらでいる浅葱とは反対に、紅は片手に小さな虫籠に移した蝶と、懷に非常食として金平糖を――浅葱には苦笑されたが――忍ばせ、腰には二振りの木刀と脇差しを差している。準備は万端だ。

しかし人攫い達は、二人の予想を裏切って早々に現れた。

昨日浅葱に絡んできたゴロツキ達とは違う顔ぶれ。けれど似たような身なりの男数人が、あれよと言う間に浅葱を取り囲む。

(…早いな…)

恐るべし浅葱の美貌、とでも言うべきか。

紅は男達に見つかからないよう、物陰に隠れながら少しずつ距離を縮める。

浅葱はしばらく抵抗するフリをしていたようだが、やがて男の一人から鳩尾に拳を受けて「うっ」と小さく呻いた。

男を殴り倒したい衝動を堪え、紅がじっとその様子を見る。今出て行つては、浅葱の献身が無駄になる。

(…っ、だが…っ)

わかっていたはずなのに、いざそれを目にとると腹立たしい。

やはり囃などは使わずに、男達を捕まえてしまおうか。

しかし紅は、一歩踏み出ようとしたところで動きを止めた。

浅葱が、確かにこちらを向いて微笑んだのだ。それは、「大丈夫だから」とでも言うように。そしてその後、フリなのか本当にそうなったのかはわからないが気絶した。

紅はくつと唇を噛んで、耐えた。

予定通り、見つからないように物影を移動し、見失わないように後をつける。

男達は気を失った浅葱を抱え、人目を避けるように夕闇の中を川沿いに歩いて行った。

ここからは身を隠せるような物陰が少なくなる。紅は小柄な体を川沿いに並ぶ桜の木の下に寄せながら、つかず離れず後を追った。

やがて男達は、小さな船着き場へと向かった。どうやらここから船を使うらしい。そうなると船で追うしかないが、それでは簡単に気付かれる。

紅は船着き場から漕ぎ出す船を見送りながら、蝶を買っておいて良かったと苦笑した。

船が完全に見えなくなるまで、そしてその後もしばらくの時を置いてから、紅は虫籠から蝶を放つ。

ぶわっと、風が桜を散らす。蝶はその一瞬、風に流されるように飛んでから、ふわふわと優雅に空へ舞い上がった。

そして迷いなく、ある方角へ飛んでいく。

浅葱の衣に吹き付けた、香料の匂いを追って。

紅は時に陸路を走り、時には水路を船で進み、蝶の後を追った。

やがて辿り着いたのは、一軒の広い屋敷。場所が六条の柳町であるから、恐らく遊郭だろう。火の都では、主に六条柳町に遊郭が点在している。表の看板を見ればわかるのだろうが、ここはあいにく裏手のようだ。

蝶は確かに、この屋敷へ入って行った。

そして裏口近くの水路に、確かにあの男達が乗っていた船が泊められている。

どうやらこの屋敷の中に、浅葱と、そして人攫い達がいるらしい。

紅はこの屋敷を取り囲む高い塀を見上げた。

漆黒の板塀は、紅の身長を優に超えている。足を引っ掛けられるようなとっかかりも無い。普通に考えて、この塀を乗り越えての侵入は無理だ。

しかし紅は、じっと塀を見据えていた。まるでその高さを測り、飛び越えようとするように。

（随分デカイ店だな……。この店が黒幕か、はたまた隠れ蓑にされているだけか……）

人攫いのアジトは無人の建物だろうと踏んでいたが、まさか営業中の遊郭の中に消えるとは。この店の者が出しているのか、ただここへ身を隠しているだけなのか……。わからない、が。

「……フン、まあいい。中へ入ればわかることだ」

日が沈み、ただ月明かりだけが照らす裏路地で、紅が微笑う。

「こんな塀など、なんの障害にもならんわ」

七、藤色の男

六条柳町に店を構える高級遊郭の一室で、男は優雅に酒と桜を楽しんでいた。

遊郭の中でも一部の上客しか通されない離れの一室。その縁側に
出て坪庭に咲く桜を眺めるその男は、まだ年のころ二十代かそこら。
しどけなく着乱れた着物の肩には、長く緩やかな曲線を描く藤色
の髪が垂らされている。整った鼻梁の、美しい男だ。しかし艶めい
た藤色の瞳は右側が前髪で隠されており、片目しか窺うことができ
ない。

二週間ほど前からこの遊郭に滞在する男は、店の遊女達に人気の
客であったが、今宵は珍しく一人だった。手酌で杯に酒を注ぎ、す
っと持ちあげる。白濁の酒がわずかに波紋を描き、そこへ狙ったよ
うに桜の花びらが落ちた。

「雅だねえ、火の都の桜は。それだけで酒が美味い」

くすつと、艶やかな笑みを浮かべる。

桜をついと見上げ、男はまるで囁きかけるように言った。

「…夜桜に惑わされて飛んできたのかい？ 小鳥ちゃん？」

月明かりが照らす、坪庭の桜の下には小柄な人影が一つ。

警戒心をあらわに男を見据える隻眼の瞳。紅だ。

紅と男の間に、風に散った花びらが舞う。その刹那、紅がざつと
地を蹴り両手に構えた木刀を男に振り落とした。

「っち！」

が、紅の一撃はあっけなく止められる。しかもそれを受け止めた
のは、刀ではなく男の扇子一つだった。しかも男は、縁側に座った
態勢のまま、微塵も動かない。

「いい打ち込みだ。けれど、小鳥ちゃん？ それでは私は倒せない
よ」

ぎりぎりと言を立てて軋む扇子。しかし男は涼しい顔で木刀を受け止め続け、まじまじと紅の顔を見つめる。

「これは可愛い小鳥ちゃんだ」

「つるさい！ お前、人攫い共の仲間か！？」

怒りに染まった瞳が、燃えるように輝いている。

最初はただの遊郭の客だと思っていた。見つかり、とりあえず騒がれる前に気絶させようと思って打ち込んだが、この男はあっさりとそれを受け止める。

腕の立つ男だ。おそらく、自分以上に。

「ふーん、なるほど」

呟き、男がぱつと扇子で木刀を弾く。

紅はとっさに後ろに下がり、木刀を構えなおした。

「さあ答えろ。人攫い共がこの店に入って行ったのはわかっている。隠し立てすると貴様もブツ飛ばすぞ！」

易々と攻撃を受け止められ、自分より実力の勝る者を相手によくこんな啖呵が切れるものだと思はれて感心した。

しかし、今の言葉で紅の目的を察したのだろう。口元に自然愉快気な笑みが浮かぶ。それを開いた扇子で覆い隠し、男は小さく呟いた。「これは面白くなってきた」と。

「なるほど。君の目的は大体わかったよ。でもね、もう少し冷静になった方がいい」

ゆつくりと男が立ち上がったかと思うと、あっという間に距離を詰められた。

「なっ」

扇子が紅の手を打ち、木刀がカランと言を立てて地に落ちる。

間近に揺れる男の髪から、伽羅の香が薫った。

そのまま男の手が紅の襟元に伸びる。襟を掴まれ、そちらに気を逸らされた隙に今度は足払いをくらった。

あまりにもあっさりと、地に組み敷かれる紅。

「君は私に敵わない悟った時点で、引くべきだった。判断が甘いね」

「つ、くそ…ッ」

男は悔しげに呻く紅にくすつと笑みをこぼすと、「静かに、」と小さく囁いた。

「人が来るよ」

さらさらと衣擦れの音を立てて、一人の童女が離れへと渡る。

桜を髪に飾り、春らしい桃色の衣に身を包む童女は、この遊郭で遊女達に仕える禿^{かむろ}だ。

禿は障子戸の前に三つ指をつき、すつと頭を下げて中に居る客に声を掛ける。

「雪藤様^{ゆきふじ}、お酒をお持ちしました」

「ありがとうございます。入っておいで」

「あい」

禿はすつと障子戸を開ける。すると、一人でいるはずの客人、雪藤の隣にもう一人いることに気付いた。

縁側の柱に身を持たれさせる男の傍らに、藤柄^{とうがら}の上衣を被った小柄な人影が横になっている。被った着物のせいで全体は窺えないが、着物の端から覗く漆黒の髪を雪藤が優しげに撫でていて、それはまるで共寝^{ともね}の後のようだった。

「あつ」

禿はぱつと頬を赤らめ、声を上げた。

だれか姉女郎との逢瀬を邪魔してしまったのかと、恐縮する。

「も、申し訳ございません…」

「構わないよ。酒を頼んでいたのは私だ。…それから、君に一つお願いがあるのだけれど」

「あい。なんでございましょう？」

「君くらいの子が着る着物を持ってきてくれないだろうか。…この小鳥ちゃんがあまりに可愛いので、無体なことをしてしまった。着

替えがほしいのだが……」

つい、と横たわる少女の首筋を撫で、妖しい笑みを浮かべる。

「まあ……」

では雪藤の相手は姉女郎の誰かではなく、禿仲間の誰かなのだらうか。

禿は好奇心いっぱい目で雪藤と、その傍らにある少女を見る。

（羨ましい……。一体誰がお相手したのかしら……）

気にはなるが、詮索しないのが遊郭の掟だ。

「くれぐれも、他の者には内密にね」

禿は「あい」と答え、その場を去った。きつと、自分の持ち物の中でも上等の着物を持ってきてくれるだろう。

禿の気配が離れるのを待ってから、雪藤は傍らに居る少女、紅に声を掛けた。

「もう大丈夫だよ。小鳥ちゃん」

「……………」

むくりと起き上がった紅は、雪藤に撫でられていた髪をばりばりと乱暴に掻きむしった。その手にはびっしり、鳥肌がたっている。

今の自分ではこの男に勝てない。人にばれて騒ぎになるのは困だろうという雪藤の口車に乗せられ、大人しく彼の言うとおりに隠れていたが、まさかこんな気色の悪い思いをすることになるうとは。こんなことなら騒ぎになるのも構わず暴れていれば良かったかもしれないと、紅はジト目に雪藤を見上げる。

「……やれやれ。少しは信用してほしいな。私は君の敵ではないよ」
助けてあげただろう？ と雪藤は言う。が、紅の警戒は解かれな
い。

「仕方がないねえ……」

言って、雪藤は面倒くさそうに前髪を掻き上げた。

薄暗い室内の、わずかな灯りに照らされるその双眸。

それを目にした時、紅は大きな瞳をさらに見開き、啞然と口を開けた。

「まさか…っ、そんな…っ。貴様っ…いや貴殿は…っ」

藤色の左目。そしてその右目は、左目とは明らかに異なる淡い碧色の輝き。

「これで信用していただけたかな？　小鳥ちゃん」

「…っなんで…」

「ん？」

「なんで貴殿がここにいるんだーっ!!」

七、藤色の男（後書き）

もう一人の主要人物、雪藤さんの登場です。結構好きです。紅がなぜ雪藤の異色の瞳を見てびっくりしたのかは、後々に判明します。

八、毒の華

衝立の陰で禿の用意した着物に着替ると、紅はむすつと仏頂面で雪藤の向かい側に腰を下ろした。これまた春らしい、紅梅重ねの衣である。

「おやおや。せっかく美しい姿なのに、そうむくれては台無しだよ？ 小鳥ちゃん」

「…戯言を。貴殿は一体どういうつもりだ？ わしにこんな恰好をさせて…」

紅が不快気に眉をひそめると、雪藤はおやおやと肩をすくめた。

「私のことは雪藤と呼んでおくれ。なに、君の身形では目立つからね。この店を探るならその姿の方が都合が良いと思うよ」

それに良く似合っている、と雪藤が微笑む。紅は「ちっ」と小さく舌打ちした。

似合う似合わないではなく、こういう動きにくい恰好が嫌なのだ。（…だが、確かに雪藤殿の言うとおりかもしれない…）

この恰好でなら、店の中で目立たず行動できるだろう。紅はしぶしぶ、頷いた。

「もう少ししたら私が店を案内してあげよう。今はまだ人の出入りが多いから、もう少し待っていなさい」

時刻はちょうど客達が店を訪れる時間帯だ。各々がそれぞれの部屋へ散ったり、店の者が肴や酒を運んだりで忙しい。

雪藤は禿に運ばせた酒をすつと杯に注ぐ。そして紅には、肴として饗された鮎の甘露煮をすすめた。

骨まで甘く煮られた鮎の甘露煮は紅の好物である。が、今はただ首を横に振って断った。囃として人攫いに囚われている浅葱を思えば、とても好物など食していられない。

「雪藤殿は知っているのか？ 人攫い共がどこにいるのか。攫われた者達がどこに囚われているのか」

「大体の見当はつくよ。店の間取りは全て頭に入っているしね」
杯の酒を飲み干し、雪藤が言う。

「しかし驚いたね。深窓の姫君と思っていた君が、まさか一人で人攫いを追い、ここまで乗り込んでくるとは」

そしてこんなところで自分と鉢合わせするとは、と微笑む。「これは運命かな」と冗談めかして。

しかしそんな雪藤の戯言は聞き流して、紅は言う。

「一人ではない。協力してくれた者が囧になってくれたのだ。だからこの店に行き着いた」

「囧…？」

それは…、と眉をひそめる雪藤。

「まずいな…」

「なに…？」

それまでのどこかふざけた雰囲気が一転、剣呑さを帯びる。

「…君は何故私がここに居るのかと聞いたね。これがその答えだ…」
雪藤は懷から、小さな紙の包みを取り出す。

「何だそれは…」

包みを開くと、そこには白い粉末が小さく一山。薬のように見えるが…。

「西宮曼珠沙華さいぐまんじゅしゃげの根を粉末にしたもの…と言えば君もわかるだろう？」

「っ！？ 西宮曼珠沙華だっ！」

西宮曼珠沙華。それは白虎帝の治める西の国、西の都の内裏にか咲かない華である。曼珠沙華は元々根に毒を持つ植物だが、西宮曼珠沙華の根は依存性の強い麻薬になる。医療目的で使用されることもあるため内裏の薬草園で栽培されているが、危険性が強いので厳重管理されている代物だ。

「そう。常用すればひと一人簡単に壊せる恐ろしい代物だ。故に厳

しく管理していたが…、一人の役人が金欲しさに西宮曼珠沙華を横流ししてね…」

その役人はすぐに捕まったが、薬草園から盗まれた西宮曼珠沙華はどこかへ売り払われていった。その行方を追っている内に、この高級遊郭に辿り着いたのだと言う。

「この店の主人と人攫い達は繋がっている。そして奴らは、不正に手に入れた西宮曼珠沙華の根を精製して薬を作った。その薬を使って、奴らは攫ってきた人間を薬漬けにし、足のつきにくい他国へ売り払おうとしているんだよ」

「っ!!！」

(そんな…それでは…浅葱は…)

「浅葱っ！」

紅は部屋を飛び出した。雪藤が何かを言った気がするが、それすら耳に入らない。

制止の言葉なら無意味だ。たとえ何を言われても、紅は足を止めなかったろう。

(薬漬けだと…っ、ふざけるな！　くそっ…わしが巻き込んだせいだ。浅葱…ったのむ…っ)

無事でいてくれと、声にならない叫びを上げる。

(たのむから…っ)

「やれやれ…」

禿ならけして立てないような慌ただしい足音で駆けて行った紅を見送って、雪藤がため息を吐く。店の間取りもわからないだろうに、あんなに血相を変えて。

「…恐らく最初は少量の薬をかがされているだけだろうが…」

少量でもしばらく体の自由を奪うのには十分だから、いきなり多量には服用させず、少しずつ慣らししていくだろうと思う。だから今ならまだ解毒薬を飲めば大丈夫なのだが…。

「話は最後まで聞くものだよ、小鳥ちゃん。それに…」

（あれには他に、やっかいな副作用があるからねえ…）

「仕方ない。どうせ予定は早まってしまったんだ。私も手伝おうか…」

雪藤は残った酒を綺麗に飲み干し、ゆっくりと腰を上げた。

「ちいっ！ 無駄に広いなこの店は！！ 面倒な！！」

紅は何度迷ったかしない廊下で立ち止まり、地団太を踏む。

離れから出るまでは良かったのだ。廊下が一本道だったから。

しかしいざ母屋に入ってみると、これが広いやら入り組んでいるやらでとても分かりにくい。

そしてそもそも、浅葱がどこに居るのかもわかっていないのである。簡単に辿り着けるはずもないが、気ばかり急いてじっとしてられない。

とりあえず人気の少ないところを手当たり次第当たるかと再び足を踏み出したところで、前方から数人こちらに向かってくる気配がした。

（っち。見つかったら面倒だな…）

隠れるべきか、昏倒させるべきか。

木刀は二本とも着替えた時に置いてきてしまったままなので、今手元には脇差ししかない。それでも数人を相手取るには十分だと構えた時、紅の頭に何かが被さった。

「っ！？」

頭に被されたのは、見覚えのある藤柄うわぎぬの上衣。

「雪ふっ…」

「しっ。じっとしておいで、小鳥ちゃん」

口元を手で塞がれ、上衣ごと抱き寄せられる。

前方から来る者達、この店の客と案内役の禿は廊下で抱き合う人

影に一瞬目を丸くしたが、気にせず通り過ぎて行った。こういったことは此処ではよくあることだからだ。

「…行っただね」

「なら離せ!!」

気配が去っても緩めない雪藤の腕を、紅が苛立たしげに振り払う。

「おやおや。せっかく可愛い小鳥を捕まえたのに…」

「うるさいっ! 戯言を聞いている暇はないんだっ!!」

「ふふっ。わかっているよ」

自分の衣を被った紅の頭を撫で、雪藤が言う。

「君はこれを被っておいで。小鳥ちゃんの眼帯は人目につくからね。大丈夫、私が案内するよ」

君の探し人のいる部屋に。

だから安心しなさいと、雪藤は微笑った。

九、闇の中の光

カタン、とどこかで響いた微かな物音に、浅葱の意識は覚醒する。

(…熱い…)

体が熱を持っているようで、不快だった。

身動みじろげば、両手と両足が縄で拘束されていることに気付く。

(くそ…っ、口の中が苦い…。まさか、何か飲まされたのか…?)

浅葱は荒い息を吐いて、身を起こした。見渡せば、自分が転がさ
れているのが狭い板張りの部屋と分かる。奥に箱や調度品が積まれ
ているから、おそらく物置だろう。

他に人の気配は無い。ただ小さな格子窓から覗く月灯りだけが、
この部屋を照らしていた。

そしておそらくその格子窓から入ってきたのだろうあの蝶が、香
料を吹きかけた浅葱の胸元にとまっていた。

(…蝶…が…)

蝶はゆつくりと、浅葱の呼吸に合わせるように翅を羽ばたかせる。
それを見つめていると、何だか無性に眠くなって、浅葱は再び浅
い眠りに落ちていった。

これは夢だと、浅葱にはわかっていた。

何故なら自分が、幼い姿をしていたからだ。

『ほら、ごらんになって。あの汚い色を』

『まあ本当に。父君や兄君はとても美しい群青の髪をお持ちなのに、
あのお子ときたら…』

『あの女に生き写しのようだわ。卑しい売女』

さやさやと笹が揺れるように、悪意のある声が響く。

どこかで聞いたことのあるこの声は、父に仕える女官達のものだ。
「…あ」

幼い自分が耳を塞ぐ。

だが聞きたくない言葉は、絶えず辺りに響いた。

『あら、売女ですって？』

『ご存知ないの？ あの女が何をしていたのか』

『本当なら此処に居られるような身分じゃないのよ』

「や…めて…。言わないで…」

母は亡くなった。お前達の心無い言葉の、悪意の、害意のせいで。

『あの女は元は遊女よ。子を孕んだからと身請けされたけれど、それだって…』

「やめて！」

『本当に父君の子かどうかわからないわ』

違う違う違う違う！！

僕は父の子だと母は言った。父も認めてくれた！！

父は…っ。

耳を塞ぎ、叫び続ける浅葱の前にひとつの人影が現れた。

ぼんやりと白に輝く衣、星空のような群青の髪の男。父だ。

『氷月…』
ひづき

父はそう名を呼んで、この上なく愛しげに自分を抱き上げる。

違うのです父上。僕は…。

「…僕は母上じゃない…！」

僕は浅葱です父上。母上じゃない。

母上はもう死んだのです。もうこの世には居られないのです。

『ほうら見て。あの髪。あの髪の色』

『まるで陰気な冬空のよう。冷たい氷のよう。なんて寒々しい…。』

きつと、』

『きつとあのお子も氷のような人間なのよ。母親そっくりね』

「僕は…、」

父の幻は消え、幼かった自分は今の年の姿になり。一人、闇の中に立ち竦む。

自分は確かに氷のような人間かもしれない。冷たい人間であるのかもしれない。

いつしか悪意ある囁きに耳を塞ぎ、目を瞑り、何も言わず。

ただ唯々諾々と生きるだけの人形になってしまったから。

怒ることも泣くことも無意味だと悟ってしまったから。だけど、

『冬は嫌いか？』

こんな自分にも、まだ心はちゃんと残っていて。

本当は痛いと苦しいと辛いと寂しいと、思っていた。だから、

『わしは冬が好きだぞ。寒いのはちょっといただけんが、だからこそ温かさを感じ入る。それにな、冬は空気が一番澄んでいるんだ。その、ピンと張りつめた感じが良い。雪遊びも、よう嗜むぞ』

そう言ってくれた、君の言葉に。

『お前の髪は、好きだ。冬の空の何が悪い。それに、そういうことを言う輩はお前がどんな髪の色をしていても、口さがなく言うであろうよ。あまり気にせんことだ。そういう輩の言に、振り回されることはない。言われたことがないのなら、わしがいくらでも言うてやろう』

きつと僕は救われていた。

君と話す、些細なことが楽しかった。

君と過ごした、短い時間は心地よかった。

『綺麗な髪だ』

「…ありが…とう…」

あの時そう言って、自分は確かに微笑んだ。
それは一体、何年ぶりの笑顔だったろう。

「うっ…」

短い夢から覚めて、浅葱は小さく呻いた。
熱がより体を苛んでいる。喉がひどく乾いていた。

「…っあ…は…っ」

これはただの熱ではないと、もう浅葱にも分かっていた。
ある欲求が、頭に焼き付いて離れない。

（…媚薬…か…っ。くそ…っ）

よりにもよって、と苦痛に表情を歪める。

ただの痺れ薬なら良かったのに。どうして、と。

浅葱はきつく、唇を噛んだ。血が滲むほどに。

痛みでなんとか正気を保ち、一心に、思う。

（…頼む…紅…）

お願いだから、君は来ないで。

傷つけてしまうから。傷つけたくないから。

こんな自分、見られたくない。君にだけは。

十、解毒

雪藤に案内された先は、遊郭の端にある小さな物置部屋だった。

「ここかっ!!」

引き戸を開けようとするが、開かない。鍵が掛っているようだ。

紅はちつと忌々しげに舌打ちして、着物の裾を上げ、足を振り上げた。

バキっ! と豪快な音を立てて、戸を蹴破る。薄暗い室内に、見知った人影が倒れていた。浅葱だ。

「浅葱っ!!」

浅葱はぐったりと倒れ込んでいる。意識はあるようで、こちらに向かってゆっくりと頭を上げたが、その動作は鈍い。

「大丈夫かっ!？」

駆け寄ろうとする紅だったが、

「来るな!!」

初めて聞く浅葱の怒声に、びくつと踏み止まる。

浅葱はぜいぜいと荒い息を吐いて身を起こすと、絞り出すように「来るな…」と呻いた。

「来ないでくれ。頼むから…」

「浅葱…」

傷ついたような紅の瞳に、浅葱の表情が陰る。

「すまぬ…、浅葱…。わしが…わしが巻き込んだせいだ…」

だから浅葱は怒っているのだと、紅は思った。

自分の浅慮が彼を巻き込み、傷つけたから。

「ち…がう…。そうじゃ…なくて…」

「だが、手を差し伸べることは許してほしい。お前は、わしが助ける」

「そうじゃ…ないんだ…」

拒絶されるのも厭わず、今度こそ紅は浅葱の傍に駆け寄った。

見れば両手両足が縄で拘束され、擦れて血が滲んでいる。

腰に差していた脇差しを抜き、縄を切っていく紅。一瞬、二人の視線が噛み合う。

（浅葱…？）

ツウっと一筋の汗が浅葱の白い頬を伝う。

間近で見ると彼の瞳は、熱を帯びていた。見たことも無いような、美しい、顔。

「…ごめん…」

その囁きは意外なほど近くに響いた。浅葱の唇が、自分に寄せられ…、

「はいはいそこまで」

触れるか触れないかというところで、二人の間を遮るように声が響く。

「雪藤殿!？」

雪藤はやれやれとため息を吐きながら、紅から引き離れた浅葱の体を抱くように自分に寄せた。そして浅葱の顎をくいと持ち上げ、まじまじと熱に浮かされる顔を見つめる。

「ほう…、随分綺麗な少年だね。ここの連中も、案外趣味が良い」

「雪藤殿っ!!」

咎めるように紅が名を呼ぶ。

戯れはよせと、怒り顔だ。

「わかっているよ。それにしても、あの薬を盛られてよく我慢したねえ。あれには強い催淫作用がある。小鳥ちゃんの傍はさぞ辛かったろう」

これをお飲み、と雪藤は袖から赤い包み紙を取り出した。中には小さな黒い丸薬が入っている。

「解毒剤だ」

しかし今の浅葱は手を上げるのも億劫なほど弱っている。
やれやれと雪藤がそれを自らの指でつまみ、小さく開かれた浅葱の口内に運んだ。

「っ！？ う…っ、が…あ…」

口に入れて一瞬の後、浅葱が苦悶の表情を浮かべて悶える。

「おい！ 苦しんでいるぞ！？」

「ああ忘れていた。これはすごく苦いんだよ。白湯なしで飲むのは辛いだろうねえ」

ふふふ、と浅葱の苦悶の表情をどこか嬉しそうに見つめる雪藤。

変態だ、と紅は思った。しかも、タチが悪い。

「笑い事か！ …っ、あ、そうだ！ これを…」

紅ははっと思い立ち、ごそごそと懐を探る。

出てきたのは、着替えた後もしっかり忍ばせていた金平糖の袋である。

その中から数粒つまんで、浅葱の口に含ませた。

浅葱は菓の苦みを打ち消すよう、ガリガリと金平糖を噛み砕いた。
そうしてようやく、落ち着いたようにほっと力を抜き、弱々しくも紅にそっと微笑みかける。

もう大丈夫だと、言うように。

「良かった…。すまん、浅葱。全てわしのせいだ」

ぱっと床に手をついて、頭を下げる紅。

しかし浅葱は責めるでもなく、その頭をぽんぽんと優しく撫でた。

「頭を上げてくれ…」

「浅葱…」

あのどうしようもない熱が引いていくのを感じながら、浅葱が言う。
う。

「お前のせいではない。自分から望んだことだ。それに、ちゃんと約束、守ってくれたろう？」

必ず助けに来てくれると。

そう言って、浅葱はこの上なく綺麗な顔で微笑った。

優しい、穏やかな眼差し。先ほどの熱の籠った瞳にはどきりとしたけれど、自分はこの表情の方が好きだと、紅は思った。

「…俺も、お前に不埒な真似をせずにすんで良かった…」

「あ、浅葱…」

唇を寄せられたことを思い出して、珍しく紅の声が上擦る。

「君達、いい加減私を無視するのはやめてくれないかな…？」

コホン、とわざとらしく咳をして、雪藤がいう。

そう言えばこの人は誰なんだろうと、浅葱は首を傾げた。

「ああ、忘れていた。浅葱、この方は別件でこの遊郭を調べていたところを行き合った。分け合って素性は話せんが、信用はできる」

「私の事は雪藤と呼んでおくれ、少年。この先の裏口から逃がしてあげるから、君達はもう行きなさい。じきに検非違使がここを包囲するからね」

紅に、「もう目的は達したろう？」と雪藤は言う。

しかし紅は、「ハッ！」と不敵に笑った。

「逃げるだど？ 馬鹿な。浅葱を酷い目に合わせた奴らに、一矢報いねば気が済まん！」

十、解毒（後書き）

相変わらず好戦的な紅です。
一応次でクライマックスです。

十一、緋色の少女

わざと灯りを少なくした裏口周辺の庭に、数人の人影が立ち並んでいる。

どれもけして身形みなりが良いとは言えない、いかにもゴロツキ然とした集団だ。しかしその中に一人だけ、豪奢な着物を纏う人物がいる。この遊郭ろうしゅの楼主だ。

「首尾はどうだい？」

楼主はそう問う。すると、ゴロツキの一人がにやにやといやらしい笑みを浮かべながら言った。

「上々です。どれもこれも上玉。数も十分だ」

「あとは今日攫ってきたのを船に積み込めば終わりだ。あれは良い金で売れますぜ」

あれ、とは今日の夕方攫ってきた少年だ。

珍しい、空色の髪をした美しい少年。さぞ高値で売れるだろう。

「薬の方は？」

「攫ってきた連中に使う分以外は全部、船底に隠しやした。あれならお役人にもそうそう見つけられねエ」

「よしよし」

楼主は満足げに笑う。この男こそ、一連の誘拐事件の黒幕だった。(…くっくっく。随分上手いこといったねエ…。笑いが止まらないよ)

西の国の知人から秘密裏に西宮曼珠沙華を買わないかと誘われた時は一度は渋ったが、これがまた精製してみると実に使い勝手が良い。体の自由を奪う麻痺薬としても、媚薬としても、また麻薬としても使えるのだ。一度麻薬漬けにしてしまえばまたそれを得るために奴らは何でもするだろうし、媚薬として使えば客が喜ぶ。

そして時期も良かった。毎年この時期は花見客同士の喧嘩騒動が頻発し、どうしても検非違使^{けびいし}の仕事が忙しくなる。自分の手下共を使ってわざとあちこちで大規模な喧嘩を起させれば、より警戒の目は緩んだ。

あとは薬ごと、攫ってきた人間を他国に売り飛ばせば終わりだ。売る先は北の国、北の都の暗黒街。あの地には古くから、朝廷も不可侵の無法地帯がある。

「どれ、では人目につかぬよう夜の内に出航しておくれ。くれぐれも……」

「見つからぬように、か？　ハッ、この下種共が」

ふいに、少女の声が響いた。

「誰だいっ!？」

楼主がぱっと声のする方を振り返る。すると、庭に面した縁側に、三つの人影が立っていた。

縁側に仁王立つのは禿姿の童女。美しい着物を纏い、片目を無骨な眼帯に隠すその姿は異質だ。恐らく先ほどの声はこの少女のものだろう。

そして、少女の横には上客の雪藤と、夕刻攫ってきた少年が立っている。

「なっ、雪藤様……？　これは一体……」

唯一顔見知りの雪藤の名を呼ぶが、とうの雪藤は苦笑して肩を竦めるだけだ。

「貴様らの悪事は全て露見している！　大人しく縛につくか、さもなくば……」

「さもなくば……？　どうしようというんだいお嬢ちゃん。たった三人で何ができると？」

楼主はにやりと笑った。

この場を見られたのはまずいが、三人とも殺すか薬漬けにして売

り払ってしまえばいい。

ちらとゴロツキ共を見やると、彼らも心得たようで手に手に得物を持ってにじり寄る。

しかし少女、いや紅はその唇にニイっと笑みを浮かべた。

「さもなくば、ブチ倒すのみよ！」

言って、紅は両手に扇子を構え、ぱっと広げる。雪藤が最初に紅の木刀を受け止めた扇子だ。脇差し以外に武器を持たない紅に貸し与えたものだが、その扇子に花開く優雅な桜吹雪に、ゴロツキ達は笑い声を上げる。

「おいおいお嬢ちゃん。そんなもんで何をするつもりだ？ 舞いでも見せてくれるのかい？」

「見たいなら舞ってやろう。ただし、代償はいただくぞ」

挑発するように、笑みを浮かべる紅。

それに乗ったゴロツキの一人が、「見せてもらおうじゃねェか！」と突進してきた。

「おらあっ！！」

力のままに刀を振り下ろす男。しかし紅はふわりと、まるで蝶が羽ばたくように飛んでみせ、そのまま男の肩に乗った。

「なにっ!？」

「甘いわ」

男に振り払われるより早く、そこから飛び立った紅が振り向きざまドゴツと重い音を立てて男の右肩を打ちつけらる。

右腕全体に痺れが走り、男はそのまま刀を落として倒れた。

その段になって、ゴロツキ共はようやく紅が手にしたものかただの扇子ではないと知る。おそらく、骨組みを鉄で作り上げた鉄扇だ。大人でも扱いが難しい物を、ああも軽々と振り回すとは。

「さあ、次はどいつだ。かかってこい！！」

身のこなしも軽い。だが、相手はまだ子供で女だ。

物騒な物を持ってはいるが、こちらの方が多勢。
そう、この時は思っていた。

ひらりひらりと、紅が次々と男達を叩きのめしていく。

初めて出会った時と同じだ。

ゴロツキ共の攻撃は当たらない。まるで体重を感じさせない動きで、蝶のように交わしていくからだ。そして、その小さな体から発せられるとは到底思えない重い一撃で倒していく。

それはさながら、舞っているかのように。

「末恐ろしい子だねエ…」

傍観を決め込んでいるらしい雪藤が、そう呟く。そして同意を求めるように、まだ弱っている体を柱に持たれさせている浅葱に視線を送る。

「…確かに」

今の紅には不利な条件が多すぎる。戦いにくい着物、扱い慣れていない獲物に、一对多数の数の不利。

にも関わらず、彼女は笑みさえ浮かべながら次々に相手を屠っていくのだ。

見れば、最初は余裕然とした楼主の表情が徐々に蒼褪め、肥えた体がふるふると震えている。あれは怒り故か、はたまた恐怖か。

「しかし美しい。そう思わないかい？　もっと見ていたい気もするが…、残念。もうすぐ終局のようだ」

彼らの視線の先、そこには死屍累々と倒れ込んだゴロツキ共の中に凜と立つ紅。まだ立っている者達は、今となっては無謀に飛びかかるうとはせず、紅から距離を置いて主である楼主を守るように囲んでいる。

「フンッ。口ほどにもない奴らだ」

バサッと音を立てて、紅が開いた扇子を閉じる。

それはまるで、威嚇するように。

「さあ、残るはお前らだけだぞ。どうする？」

閉じた扇子で楼主達を指差し、紅が言った。

「ば…馬鹿な…こんな…こんなことが…」

震える体で、楼主が呻く。

こんなはずではなかった。役人の目を掻い潜り、巨万の富を得るはずだったのに。

それがこんな、こんな子供一人に…。

(…そ…そうだ、こ…こんな子供…一人くらい…)

楼主は震える手で己の懐を探る。確か此処に、入れていたはずと。そして指先が懷紙で包んだそれを探り当てた。くっくと、また笑みが零れる。

「いいや、お嬢ちゃん。もう…」

「遊びは終わりだ!!」

叫び、楼主が紅目がけて何かを投げつける。

「!?! 危ない!! それを吸うな!! 紅!!」

立ち上ったのは白い粉塵。立ち上る甘ったるい香りに、最初に飛び出したのは浅葱だった。

嗅ぎ覚えのある香り。これは、西宮曼珠沙華の粉末だ。

「なにっ!?!」

とっさに袖口で口元を隠すが、その隙を狙ってゴロツキ達が一斉に襲い掛かる。

「うあっ…!!」

しかし悲鳴を上げたのは紅ではなく、庇うように彼女を突き飛ばした浅葱。

彼は避けきれなかった一撃をこめかみに喰らい、そのまま地に倒れ伏す。

「浅葱っ!?!」

切れたこめかみからにじみ出る赤い血が、ポタタツと地に落ちた。

「…っ！！ 貴様らあああああっ！！！！！！」

激昂して叫ぶ紅。鉄扇を投げ捨て、ぱっと脇差しを抜き、浅葱を庇うように前に出る。

その燃えるような視線だけで、腕に覚えのあるゴロツキ共が怯んだ。今にも爆発しそうな怒りを孕む、炎のような瞳。

「あーあ。大変だねえ…」

一人涼しげに呟くのは雪藤だ。だが言葉とは裏腹に、その唇には笑みが宿る。

「怒れる鳥が目を覚ますよ…」

「…紅…？」

浅葱がこめかみを押さえながら、ゆっくりと身を起こす。

そこから見つめる紅の背中に、立ち上るような炎の幻影が見えるのは、どうしてだろう。

ざわざわと、空気が揺れる。

幻かと思われた炎の影は徐々に濃さを増し、風も無いのに紅の髪を揺らした。

（…炎…が…）

確かに立ち上っているのだ。それはまるで、紅の怒りに呼び覚まされるかのように。

ふわりと、紅の髪が揺れた。そしてざんばらの短い髪が揺れるごとに伸びていき、色も漆黒から色鮮やかな緋色へと変貌していく。

腰まで伸びた緋色の髪。そしてその背中に炎が生き物のように蠢いたかと思うと、それはまるで鳥の翼のような形になった。

炎の翼。それは確かに、怒れる緋色の鳥。

（…炎の…鳥…。それは…、まさか…紅…は…）

浅葱はただ茫然と、その緋色を纏う少女を見つめる。

それはゴロツキ共も同じだったようだ。中には腰を抜き、恐ろしげに後ずさりする者もいる。

「わしの顔は知らずとも、この炎、そして…」

紅の右手が、眼帯に伸びる。

それを取り払い地に投げ捨てると、ゴロツキ共の動揺が増した。皆一様に、放心したように紅を見ている。

「この双眸には覚えがあるう！！ お上の禁を犯し民を傷つけた貴様らの所業！！ 死よりも辛い罰が待っていると心得よ！！ 逃げる者は今この場で焼き滅ぼしてくれる！！」

紅の一喝。男達は怖れ慄くように、体を震わせた。

まだ呆然とする浅葱のその肩を、ぽんぽんと叩く手があった。雪藤だ。

彼はやれやれと、浅葱をこめかみに手巾を当てた。

「そろそろ引き際だねェ。彼らも、私達も…」

そしてその手巾を浅葱に持たせると、その両の手を合わせて三度、鳴らした。

するとその音を合図に、塀を越えて次々と黒装束の男達が入ってくる。

「けっ、検非違使！！」

そう叫び声を上げたのは楼主だ。

闇に溶け込む漆黒の装束は悪党共に恐れられる検非違使の証。

彼らはゴロツキ共や楼主を次から次へと縄で捕らえると、揃って紅の前に膝を付いた。

そしてその中の一人が、口元を隠していた布を取り去って一步前へ出る。

まだ若い、銀の髪的青年だ。

「…九郎…。貴様が動いていたのか…」

紅が忌々しげに、その名を呼ぶ。

九郎と呼ばれたその青年は、恭しく一礼すると、こう言った。

「お元氣そうで何よりです、宮様。ですがもう、遊びの時間は終わりでございます」

「…わかっておる。此度は、大人しく帰る…。…浅葱、」

くるっと、紅が振り向いた。

初めて目にする、今まで眼帯に隠されていたその右目。それは、陽光のような金の色。

（…炎の翼に…異色の瞳…。やはりお前は…）

この世界で二色の瞳を持つのは、一国を統べる帝と、その後継である春宮のみ。二色の瞳は、国の守護神に帝として選ばれた証なのだ。

何故ならば、四神は自分が帝と認めた者の体に宿る。半身を帝に、もう半身をその後継に。そうして彼らは、片方の目に四神の目を宿すことになる。

「わしの本当の名は紅蓮^{こうれん}。朱雀帝が第三子、春宮紅蓮公主である」

黙っていて、悪かったと紅が力なく笑う。

その笑みだけを残して、紅は九郎と共に姿を消した。

いつの間にか雪藤の姿も無く、店には検非違使達の捜査の手が入り。

浅葱もまた、被害者として検非違使の宿所で手当てと簡単な事情聴取を受けた。

傷の手当てを受けながら、浅葱は紅の事を思う。

朱雀帝の娘。

次代の帝となる、四神朱雀を身に宿す少女。

あの髪の変化や炎の翼は、朱雀の力的一端だったのだ。朱雀を身に宿す者は、炎を自在に操れると聞く。

「紅が…、そうか…。そうだったのか…」

普通に考えれば、もう二度と会えない相手だ。

しかし浅葱の顔に浮かんだのは、どこか晴れやかな笑み。

彼の中で、この時一つの答えが出た。

それは諦めではなく、ましてや逃げることもない。

自分自身で選ぶ、己の生き方だ。

十一、緋色の少女（後書き）

長くなってしまいました……。が、これにてようやく紅の正体が判明
！！

雪藤さんについては次の最終話できっちり正体がわかります。
そして浅葱の正体と、彼が決めた「生き方」も次でわかります。

最終話、そして新たな始まりの物語

広大な火の都を一望する空中に、朱雀帝の住まう南の内裏がある。

南の国を守護する四神、朱雀の力で内裏一帯が空に浮かんでいるのだ。

そしてその奥。後宮に隣接する春宮の在所に、朱雀帝が一人の客を伴って訪れていた。

家出から帰って以来、ずっと宮に籠って塞ぎこむ愛娘のご機嫌伺いのために。

「ほら公主よ、そなたの望みの太刀が出来上がったぞ？ 此度のことはこの父が悪かった。ほれこのように謝るから、その可愛い顔を見せておくれ」

絢爛豪華な赤と緋色の衣を纏い、絹のような漆黒の長い髪をいくつも金の簪で結い上げ、見る者が思わず凍りつくような美貌を誇る朱雀帝は、そう愛娘に語りかける。

今は春宮としての衣を纏い、父である朱雀帝と対になる二色の瞳を外に向けたまま、紅はただため息を吐くばかり。家出から帰ってきてもう一月になろうというのに、ぼうっと空を見つめてばかりいるのだ。

「…うるさい…。太刀を置いてとっと出ていけ…」

「そなたが太刀にも懐柔されんとはのう…。一体家出先で何があったのだ？ 公主。まさかとは思うが、男か？ のう、どう思われる？ 西の帝よ」

どこか楽しむ風情で忍び笑いを浮かべ、朱雀帝が隣に立つ男に話を振る。

「さあて…、どうでしょうねえ…」

藤色の髪を結い上げ、瞳を隠していた前髪も後ろに流し、品の良

い翡翠と白の衣を纏うその男は雪藤だ。

彼こそが、西の国を統べる帝、白虎帝である。その藤と碧の双眸が、ふふっと愉快そうに細められた。

「綺麗な少年と、一緒に居たようですが…」

そう意味ありげに雪藤が言うと、朱雀帝は上機嫌で手を打つ。

何しろこの娘ときたら、今の今までちつとも色恋沙汰に縁がなかったのだ。

「ほう！ さすがは我が娘。この父を見慣れておるせいで目が肥えているからな」

並大抵の者では目に入るまいと、そうのたまう朱雀帝に、紅が思わず振り返る。

「うるさいわ馬鹿め！ 下種な勘ぐりをしておって！！ この自意識過剰親父が！！」

そんなんだから母宮に嫌われるのだ！ と紅が言えば、なにを言うかあれが中宮の愛情表現だと朱雀帝が言い返す。

「ハッ、もう何月も母宮に会ってもえぬくせに」

「おやおや。家出ばかりの馬鹿娘は知らぬかもしれないが、中宮は今持病を患っておる。故に会えぬだけよ。文のやりとりは今も日には下らんぞ」

「知らぬは馬鹿親父だけだ。母宮のそれは仮病だぞ。現にわしの所へはもう何度もお渡りになっている。文とて女官に字を真似させ、書かせているのだ」

「なにっ!？」

突然勃発した親子喧嘩に、雪藤はやれやれと肩をすくめる。

「その分だと何故母宮が会うて下さらんのかもわかっておらんだろう。わしの所へ戯言を言いに来る暇があったら、とっとと母宮に土下座でもしに行くがいい！ わしは馬鹿親父の相手をしている暇はないのだ」

今回の事件で、己の無力さ、至らなさを知った。

自分は自惚れていたのだ。自分には、人攫い事件くらい軽く解決

できるものと思っていた。が、結局自分がしたことはただ浅葱を巻き込み、傷つけたことだけ。

事件は放っておいても、解決していたのだ。

帝である雪藤が自ら、自分の宮から流出した西宮曼珠沙華の行方を追っていた。そしてそれが火の都の遊郭に運び込まれたことを突き止め、朱雀帝に協力を仰ぎ手勢―検非違使の一部―を借り受けて自ら遊郭に客として潜入した。

順調に情報や証拠を集め、捕縛に踏み切る手前で紅が乱入してきたのだ。

自分が関わらなくても、事件はいずれ解決していた。

その事実が、今なお紅を苦しめる。自分が余計なことをしたから、浅葱は傷ついた。自分が余計なことをしなければ…、と。

だから自分はもっと学ばねばならない。もっと武芸の腕を磨かなくてはならない。

そう思うのに、あの日別れたままの浅葱の顔が忘れられなくて、申し訳なくて。

ずっと欲しかった太刀が目の前にあっても、ちっとも嬉しくない。心にかかった霧が、ずっと晴れないでいるのだ。

「…主上、ご歓談中の所失礼いたします」

ふいに、ずっと端に控えていた九郎が声を上げる。

彼は雪藤に貸し出された手勢の指揮を執っていた蔵人である。蔵人は帝の秘書的な役割をこなす側近だ。そして九郎は、紅の乳母の息子、つまり乳兄妹でもある。

「お客人がお見えになられたようです」

先触れの女官から来客を知らされた九郎が、その報を告げる。やがて、数人の女官を伴ってその客人が姿を現した。

それは、青と銀の衣を纏う、空色の髪の少年。

「…浅…葱…？」

こちらに向かい、丁寧に一礼する少年。

まさか、そんな、と紅は眼を見開く。

「お初にお目にかかります。南の御方、西の御方。わたくしは青龍帝が第二子、浅葱」

そして頭を上げた浅葱は、確かに、紅に向かって微笑みかけた。

「春宮紅蓮公主様とのご縁談の件、返答に参上いたしました」

(っ!?)

浅葱が件の縁談の相手!? と紅は絶句する。

しかしそんな娘の心中など知らず、朱雀帝は上機嫌で浅葱を迎え入れた。

「おお! そうか、そなたが青龍帝自慢の息子殿か。ほれ公主。こちらがそなたの嬪殿候補だぞ。若くて美しかろう」

朱雀帝は親しげに浅葱の肩を抱き、紅の近くに寄せた。

思いもかけない事の成り行きに、驚いたのは紅だけではない。

雪藤もまた「おやおや」と目を見張り、楽しそうに笑む口元を扇で隠した。

「…黙っていて、ごめん…」

浅葱は苦笑して、紅にそう語りかける。

「…見つけたんだ。父と約束した、母の形見の耳飾り…」

紅が去ってから、浅葱はまず酒楼に戻った。

すると、紅の分も浅葱の分も、すでに払いは済んでいるという。

おそらく、九郎という人が払ったのだろうと、浅葱は思った。

そして両替商に届いた金を受け取ると、すぐに母のいたという遊郭を訪ねた。

もう十何年も前の事なのに、遊郭を訪ねた浅葱の髪の色を見て、遊郭の楼主はすぐに浅葱の母の事を思い出したのだと言う。そして事情を聴いた楼主は、快く浅葱に協力してくれた。

「…とても親切な方だった。母が懇意にしていた道具商や付き合のあった遊女達、母に仕えてくれていた禿達かむろを紹介してくれたんだ」
それからは、遊郭の一室を拠点に方々を捜し回った。

楼主はもう南の国にいない人達の所にも、文を出して耳飾りの所在を尋ねてくれた。

そうしてようやく、見つけたのだ。

当時、母の禿をしていたという女性。身請けされてからは都の端で小さな料理屋を営んでいた女性の元に、耳飾りはあった。

青龍帝に身請けされる時、母が別れの際に落としていった物を、今生ではもう会うこともないだろう姉女郎の形見として、大切に取っておいたらしい。

女性もまた、料理屋を訪れた浅葱を見て一目で氷月太夫ひつきたぬの子だと分かったと、涙ながらに語ってくれた。そして快く、耳飾りを譲ってくれた。「姐様もきつと、それを望んでおられます」と。

そしてその耳飾りを手に、浅葱は青龍帝の元へ戻り。

自由を勝ち取った。自らで選ぶ、己の道を。

紅は黙って、浅葱の話を聞いていた。

良かったと、心から思う。今日の前に居る少年は、初めて会った頃とどこか違う。

たったひと月の間に、彼を覆っていた諦めや憂いが綺麗に取り払われたようだった。

「今から言うことは、けして誰かに強制された言葉じゃない。それだけは、信じてほしい。俺は自分の意志で、紅との縁談を受け入れる」

そして彼は、袖から錦の袋を取り出し、それを紅に手渡した。

紐解いて中を見れば、そこには色とりどりの金平糖がぎっしり入っている。

「紅にあげる…」

「浅葱…」

「言っていただろう？ あの夜に。ちゃんと相手を好きになれるかわからない結婚は不幸だって」

心の通わない結婚は辛いと、言っていた少女。

「だから紅が、俺を好きだと思ってくれたら。今でなくてもいい、

何年先でもかまわない。そう想ってくれた、その時には、」

俺と結婚してください。

そう、空色の髪の少年は言った。とてもとても、美しい笑顔で。

「っ！」

紅の頬がかああっと思つ赤に染まる。

「あっ、あさっ、浅葱っ」

あのならっ！ と貰った金平糖の袋をぎゅっと握りしめ、紅が言う。
「…わ、わしで…いいのか？ わしはきつとこれからも女らしくな
んてしたくないし、我儘も言う。武器も手放さぬ。それに…っ」

「紅がいいんだよ」

「…っ、それに…っ。好きになる…とか…、愛する…とか…、まだ
わからん…。浅葱のことは、好ましいと思う。だが…、夫婦のそれ
は、親愛の情とは違うだろう…？ …わからん…のだ…」

自分は帝位を継ぐ身だ。

いずれ伴侶を迎えねばならないことは分かっていたが、当分は断
り続けようと思っていた。父の言うように色恋沙汰には興味が持て
なかったし、他にやりたいことがいっぱいあったからだ。

でも、

「大丈夫。俺は気が長い」

浅葱となら、ゆっくり築いていけるのかもしれない。

紅はぎゅっと、浅葱に抱きついた。

「…っ、まずは、一緒にこの金平糖、食べような…っ」

それが紅の、今できる精一杯の答えだった。

「ほどほどになら」

苦笑して、その自分に飛びついてきた少女の背をぽんぽんと撫で
る。

友人同士のような、兄妹のような、そんな関係でも。

また君の側に居られるならそれでも構わないと、浅葱は思う。

しかし、そんな浅葱の肩をぽんぽんと扇で叩く者があった。

「ちょっと待ってもらえるかな？ 東の若君」

雪藤が、口元に不敵な笑みを浮かべて浅葱の隣に並び立つ。

そして突然の展開に完全に置いてけぼりにされていた朱雀帝に、

「ところで、」と話を切り出した。

「東の若君はまだ、公主殿の婿『候補』なのでしょう？ ならば私

も、名乗りを上げてよろしいかな？」

「「なにっ!？」」

雪藤の思いがけない言葉に、朱雀帝と紅の親子が揃って声を上げる。

「貴殿の御息女は実にお可愛らしい。公主殿を妻にすることができ
るなら、私は帝位を弟に、春宮に譲ってもかまいません」

何しろ見ていて飽きない。退屈な帝位にあるよりずっと、面白い、
との囁きは、口元を覆う扇子の陰に隠された。

「いかがでしょう？ 南の帝よ」

「ふっ…。ふふふふ！ さすがは我が娘!! 二人の美男子から求
婚されるとは…!!」

上機嫌に高笑う朱雀帝の視線が、浅葱、そして雪藤に向けられる。

「一人は青龍帝の皇子、一人は白虎帝とは…。いっそ玄武帝の所にも
声を掛けてみるか？」

「っっ!!!!!!」

親に似たのだなあ、と上機嫌に頷いている朱雀帝。

浅葱は自分の腕の中でふるふると震えている紅に危機を感じ、さ
っと身を離す。

「っ…こ…んの…」

「糞親父ーいっ!!!!! いっぺんくたばれ!!!!!」

叫び、実父に飛びかかる紅。

朱雀帝の頭に襲い掛かり、乱暴にその簪を引き抜いては投げ捨てていく。

「んなっ！ 何をするか馬鹿娘！！ イタっ…っ、痛いというに！！」

髪も乱暴に引っ張られ、冗談抜きに痛いのだ。

「うるさいっ！！ 馬鹿なことばかり言いおって！！ それでも貴様帝か！！」

「ああ帝だとも！！ そしてそなたの父親だ！！」

「貴様の血が入っているかと思うと反吐が出るわっ！！」

「何だとッ！！ この馬鹿娘！！ それでも我が娘かつ！！ せっかく美しく産んでやったものをそのように粗雑に育ちおって…」

「産んだのは貴様ではなく母宮だろう！！ ふざけたことを言うとも母宮に言い付けるぞ！！」

「なにっ。それはやめろ本当にやめてくれ」

中宮に嫌われたら生きていけん！！ と朱雀帝が叫んだところで慣れた様子の九郎が「はいはいそこまでですお二方」と仲裁に入った。

ほらこれだから面白い、とほくそ笑む雪藤。

浅葱は思わず、「はははっ」と声を上げて笑った。

この騒がしい少女と自分は、いったいどんな人生を歩んでいくのだろう。

彼は生れて初めて、自分の将来が「楽しみだ」と、そう思えた。

最終話、そして新たな始まりの物語（後書き）

今回も長くなりました。

朱雀帝が好きすぎて筆が…（笑）

これにて緋色くはいったん完結です。が、番外編や続編など続いていきますのでどうぞ今後もお付き合いください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1677v/>

緋色ノ鳥ハ花ニ舞ウ

2011年8月3日03時15分発行